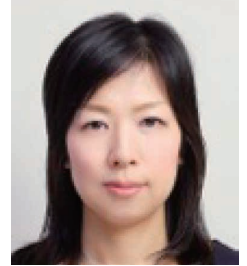


サウジアラビアにおける 政治エリート変容の兆し



上智大学 総合グローバル学部 准教授 辻上 奈美江

2018年12月末、サウジアラビアの内閣再編に反応した海外メディアの間では、さまざまな分析や憶測が飛び交った。ハーショグジー事件に引きつけた分析が多く見られたが⁽¹⁾、それに対してサウジ政府は予定通りの内閣再編と主張している。サウジの人事については、われわれ部外者にはわからないことが多く、政府の目的を知ることは容易ではない。だが、公開情報を手がかりに今回の内閣再編でどのような人事が行われたのか調べてみた。

サウジの支配エリートを研究するグロスマーヤーは、政治に最も影響力を有するコア・エリート（政策決定者）層を王族が独占し、政策決定にある程度の影響力を有する中間エリートには、王族、ウラマー（イスラーム学者）、そして一部の専門家がいると論じる。そして、間接的に戦略的決定や国家アジェンダに寄与するサブ・エリート層には、王族、ウラマー、部族長、ビジネスマン、専門家などがいるとした⁽²⁾。専門家とは、欧米の大学で修士号や博士号を取得したテクノクラートのことを指す。グロスマーヤーは、エリート層は変化するものだとしているが、2015年以降のサルマン国王統治下におけるサウジでは、コア・エリートと中間エリートに変化が起きていることが、今回の内閣改造でかなり明らかになってきた。

経験豊かなテクノクラートの登用

まず、今回の内閣改造では、政界で豊富な経験を有するテクノクラートが起用された。具体的には、外相として、アーデル・アル＝ジュベールに代わって、イブラヒーム・アル＝アッサーフが任命された。今回外務大臣を退いたアル＝ジュベールは、引き続き国務大

(1) たとえばロイター通信は、イメージ改善のため、ベテランの元財務大臣が外相に起用されたと報じた。Rashad, Marwa., Paul, Katie. "Saudi King Taps Veteran Finance Chief As Foreign Minister to Improve Image" Reuters, December 27, 2018.

<https://www.reuters.com/article/us-saudi-politics/saudi-king-taps-veteran-finance-chief-as-foreign-minister-to-improve-image-idUSKCN1OQ109>

(最終閲覧日：2019年2月6日)

(2) Glosemeyer, Iris, 2004., "Saudi Arabia: Dynamism Uncovered," in Volker Perthes ed., *Arab Elites: Negotiating the Politics of Change*, Lynne Rienner Publishers, pp. 141-169.

臣外務担当に任命されている。そして、国務大臣のムサーイド・アル＝アイバーンが国家安全保障センター顧問に任命された。

それぞれの人物について確認しておこう。まず、有力者を多く輩出してきたリヤド州マジュマアの出身のアル＝ジュベールは、父親が外交官であったため、ドイツ、イエメン、レバノン、アメリカなどで教育を受けた。アル＝ジュベールは、学士号・修士号ともに米国の大学で獲得しており、英語に加えてドイツ語にも堪能であるとされる。駐米サウジ大使館のウェブサイトによれば、アル＝ジュベールは外務省入省後、ワシントンの駐米サウジ大使館にて大使特別補佐官に任命された。湾岸戦争の「砂漠の嵐」作戦では、サウジ東部の都市ダハラーンでの多国籍軍との合同情報局の設置に関わったほか、1991年のマドリード中東和平会議のサウジ代表団を率いるなど、次々と重要な任務を任された。2000年には、皇太子府の外交問題顧問に任命され、2005年には王宮府顧問、2007年には駐米大使に任命されるという華々しいキャリアを積んできた⁽³⁾。アル＝ジュベールが海外の専門家からも注目されるようになったのは、駐米大使任命後である。駐米大使としての役割はもちろん、たとえば2011年にサウジがイエメンのホーシー派に対する攻撃を開始したことをメディアに発表するなど⁽⁴⁾、駐米大使の権限を超えた役割を果たすこともあった。アル＝ジュベールを国務大臣として新たに任命したのは、彼が引き続き外交にとって必要な存在であるとされたからと思われる。

アル＝ジュベールにかえて外相に任命されたのが、元財務大臣のイブラヒーム・アル＝アッサーフである。アル＝アッサーフは1996年から2016年までの20年にわたり財務省を率いたほか、IMF や世界銀行のサウジ代表を務めた経験を有する。1949年にカシーム州で生まれ、デンバー大学で経済学修士号、コロラド州立大学で経済学博士号を取得したエリートである。2017年11月の汚職摘発のときに摘発されたものの、すぐに潔白が証明されていた。今回の外相抜擢は、外務省改革が目的であるとされているが、アル＝アッサー

筆者紹介

2008年神戸大学大学院国際協力研究科博士後期課程修了。博士（学術）。日本学術振興会特別研究員、高知県立大学講師、東京大学特任准教授などを経て現職。

著書に『現代サウジアラビアのジェンダーと権力』（福村出版、2011年）、『イスラーム世界のジェンダー秩序』（明石出版、2014年）、共著に『中東政治学』（有斐閣、2012年）、Higher Education Investment in the Arab States of the Gulf (Gerlach, 2016)、Arab Women's Activism and Socio-Political Transformation (Palgrave, 2018) など。共訳に『21世紀のサウジアラビア』（明石書店、2012年）など。専門は中東地域の比較ジェンダー論および地域研究。

(3) 駐米サウジアラビア大使館ホームページ

<https://www.saudiembassy.net/minister-foreign-affairs-adel-bin-ahmed-al-jubeir>
(最終閲覧日：2019年1月23日)

(4) Botelho, Greg., Ahmed, Saeed. "Saudi-Led Coalition Strikes Rebels in Yemen, Inflaming Tensions in Region" *CNN*, March 27, 2015.

<https://edition.cnn.com/2015/03/26/middleeast/yemen-saudi-arabia-airstrikes/index.html>
(最終閲覧日：2019年2月2日)

フの名誉回復という目的も込められている可能性はあるだろう。余談だが、日本に留学経験があるサウジ政府関係者によると、サウジでは大臣が変わると半年程度は何も仕事が進まないという。大臣が指揮系統を握っているため、具体的な業務が決定されて振り分けられるまでに時間がかかるということのようである。大臣が交代になるたびに業務が停止するという点では、効率性は著しく低下することになるが、大臣に権力が集中していることの裏返しでもある。省庁の改革には、トップの人物を変えるのが最も効果的ということになる。

そして、2017年に新たに設立された国家安全保障センターの顧問に任命されたのがムサーイド・アル＝アイバーンである。アル＝アイバーンは、ハーバード大学で学士号から博士号までを取得した超エリートで、サウジの名門大学であるサウード王立大学において国際法の教鞭を執り、同大学法学部長を務めた経験も有する。ファハド国王時代の1992年から国務大臣を務めたほか、王宮府顧問、石油省顧問、アラムコ理事などの国家の重要なポストを兼任してきた。2012年には当時皇太子だったサルマンのロンドン外遊に同行するなど、サルマンからも強い信頼を得ていることがうかがえる⁽⁵⁾。2017年に国家サイバーセキュリティ評議会が設置された際にも、アル＝アイバーンは議長に任命されていた。彼の安全保障分野における経験が買われたと考えられる。

テクノクラートを起用することは、新しいことではない。サウジでは1970年代から、海外の大学で専門的な知識を身につけた非王族の専門家らを、経済や財政、石油政策の分野に積極的に登用してきた⁽⁶⁾。比較政治学者の大嶽秀夫の議論を借りれば、コア・エリートの王族は、専門分野における体系的知識や技術を有するテクノクラートをこれらの分野に配置することによって、自らが政治的リーダーシップを保持しながら、統治の正統性を獲得することができるということになる⁽⁷⁾。

〈若手の登用と『ビジョン2030』〉

変化として観察されることは、コア・エリートおよび中間エリート層に、王族・非王族ともに海外経験の浅い若手が参入してきていることである。ムハンマド皇太子はその最たる例であるが、彼以外にも、ムハンマド皇太子の実弟で2017年から駐米大使を務めるハリド・ビン・サルマン（1988年生まれ）や、2017年から内相を務めるアブドゥルアジーズ・ビン・サウード（1983年生まれ）がいる。2018年末の内閣改造では、これに加えて、

(5) Henderson, Simon. “The Man Who Would be the King” *Foreign Policy*. April 10, 2012. <https://foreignpolicy.com/2012/04/10/the-man-who-would-be-king/>

(最終閲覧日：2019年2月2日)

(6) 辻上奈美江2012「サウディアラビアの体制内権力」酒井啓子編著『中東政治学』pp. 49-62.

(7) 大嶽秀夫1989「テクノクラシー論の再構成——比較政治学の一枠組みとして」『レヴァイアサン』4号. pp. 7-24.

30歳代の、ムハンマド皇太子の右腕とされる二人が国家警備省と娯楽庁に配置された。

国家警備相に任命されたのは、1986年生まれのアブドゥッラー・ビン・バンドル（以下、アブドゥッラー前国王との混乱を避けるため、名前のイニシャルをとって「AbB」と呼ぶ。アブドゥッラー元国家警備隊長・前国王を指す場合は、イニシャルは使用せず「アブドゥッラー」を使用する）である。なお、日経新聞では、バンドル元駐米大使が国家警備相に任命されたと報じられたが⁽⁸⁾、これは誤りである。また AbB の「アブドゥッラー・ビン・バンドル」は「バンドルの息子のアブドゥッラー」という意味だが、駐米大使を務めたバンドル・ビン・スルタンの子ではない。彼は、初代国王アブドゥルアジーズの10番目の子バンドルの子で、第三世代である。AbB はリヤド育ちで、国内で教育を受けており、日経で報じられたような「英国で軍事を学んだ」経験はない。

AbB は、2008年にサウード王立大学で経営学の学士号を取得したが、学生の頃から起業するなど、いかにも最近の若者らしいバックグラウンドを持つ。卒業後はリヤド州知事事務所に勤務し、ムハンマド皇太子の特別顧問を務めた。サルマンが皇太子になってからは皇太子府に勤務し、サルマンが国王になるのに伴って、AbB も王宮府に勤務先を移した。このことからわかるように、AbBのキャリアは、サルマン国王とムハンマド皇太子とともに蓄積された。そして、2017年4月からはメッカ副州知事を務めていた⁽⁹⁾。

国家警備省は王族警護と二大聖地の警護が主な任務である。国家警備省は、アブドゥッラー前国王が1962年から2010年までトップを務めた機関でもある（当時は「国家警備隊」と呼ばれた）。アブドゥッラーは、ステイリー・セブン⁽¹⁰⁾のような有力な同腹の兄弟を一人も持っていなかった。そんな彼が国王にまでのぼりつめたのは、同省が部族出身者を多く雇用しており、アブドゥッラーが国家警備隊長として部族をまとめる役割も担ってきたことと無関係ではないだろう。

2010年以降は、アブドゥッラーの息子ムトゥイブに国家警備相のポストが移譲された。このためアブドゥッラー国王時代には、国家警備相職は、のちに国王になる可能性もある重要なポストと見られてきた⁽¹¹⁾。ところが、2015年にアブドゥッラー国王が亡くなりサルマンが国王に就任すると、アブドゥッラーの息子のほとんどは要職を追われてしまった。当時、かろうじてムトゥイブだけが国家警備相としての立場を維持していたが、ムトゥイ

(8) 「サウジ内閣改造、皇太子中心の体制強化 外相ら交代」『日本経済新聞』2018年12月28日付

(9) “‘abd allah bin Bandar’ min nā’ib ‘amīr makka ‘ilā wizāra al-ḥaras al-watānī” sabq, December 27, 2018.

<https://sabq.org/Wc4FdS>

(最終閲覧日：2019年2月5日)

(10) ステイリー家出身の母親を持つ初代国王の息子たち7人を指す。年長者からファハド元国王、スルタン元皇太子、ナーフ元皇太子、サルマン国王などがいる。いずれも政界で強大な権力を有したため、「ステイリー・セブン」と呼ばれている。

(11) Henderson, 2012

ブは2017年11月の汚職摘発で拘束され、大臣職を解任された⁽¹²⁾。この時点で、アブドゥッラー前国王の息子たちは皆、政界から姿を消した。

しかし、ムトゥイブ更迭後の国家警備相の人事では、アブドゥッラー国王時代の国家警備隊の方針が維持されたことを示唆する人物が選ばれた。この時、新たに国家警備相に任命された王族のハーリド・アル＝ムクリンは、父親のアブドゥルアジーズ・アル＝ムクリンが国家警備隊の設立に関わった人物のひとりで、のちに国王となるアブドゥッラーとともに1960年代に国家警備隊の改革に取り組んでいた⁽¹³⁾。

AbBは、そのようなポストに今回任命された。30歳代前半にして、二大聖地のひとつであるマッカ、サウジ第二の都市ジェッダ、そしてターイフなどを擁するマッカ州の副知事に選ばれていたが、今回の内閣改造では、さらに昇進して王族警備を任された。王族の警護を主な任務とする国家警備省は、サウード家の防衛という意味でも重要な機関である。ムハンマド皇太子にとっては、国家警備省についてはこれまではアブドゥッラー前国王の方針を引き継いできたが、今後は自らの影響力をより行使しやすくなると思われる。

そして、ムハンマド皇太子が信頼を寄せるもう一人の人物が、娯楽庁長官に任命された1981年生まれ（37歳）のトルキー・アール＝シャイフである。アール＝シャイフは、ファハド王安全保障専門学校を卒業し、内務省、リヤド州知事事務所、国防省、皇太子府でそれぞれ勤務した経験を有する。さらに2015年には王宮府顧問に任命され、2017年6月からは王宮府顧問（閣僚級）に昇格した。この経歴からも、アール＝シャイフもAbBと同様、サルマン国王とムハンマド皇太子に仕える中でキャリアを築いてきた人物であると考えられる。アール＝シャイフは、加えて、スポーツや詩・音楽などへの造形が深いとされる。2018年6月には総合スポーツ庁理事長に就任したほか、エジプトの「ピラミッド・スポーツ・クラブ」を所有し、「アラブ・サッカー連盟」の理事長を務める。また彼は詩人でもあり、詩吟の会を主宰するほか、彼が作詞した詩はアムルー・ディヤーブやムハンマド・アブドゥラアラブの著名な歌手の歌として歌われている⁽¹⁴⁾。

アール＝シャイフのような人物が娯楽庁のトップに選ばれたことは、これまでの「ビジョン2030」の展開と今後を見渡す上で、興味深い。「ビジョン2030」は、人口に占める割

(12) 汚職摘発については、福田安志「サルマーン国王の統治とムハンマド皇太子の権力」『中東研究』第534号（2018年 Vol. III）pp. 7-18、辻上奈美江「サウジアラビア『汚職摘発』の波紋」『外交』Vol. 46 Nov/Dec. 2017, pp. 130-135. など参照。

(13) “FaceOf: Prince Khalid bin Abdul Aziz bin Ayyaf Al-Muqrin, Minister of the Saudi National Guard” *Arab News*. November 4, 2018.
<http://www.arabnews.com/node/1399116/saudi-arabia>
(最終閲覧日：2019年2月5日)

(14) “man huwa turkī āl-shaikh” al-iqti şādī.
<https://aliqtisadi.com/>
(最終閲覧日：2019年2月5日)

合の高い若者を意識した社会・経済分野の改革案である。活気ある社会づくりに向けて、映画館の開設やコンサート・ライブの開催から、コミック・コンテストやファッションショーの開催まで、これまでのサウジ社会では想像できないような数々の文化娯楽活動が行われてきた⁽¹⁵⁾。これらの中には、多くの人々を動員するのに成功したイベントもある。しかし他方で、宗教界や一般の人々の間で、文化やジェンダー規範を揺るがすという理由で苦情が出たイベントもある。アブドゥルアジーズ・アール＝シャイフ最高法官も、コンサートや映画は道徳的腐敗をもたらすとして反対していた⁽¹⁶⁾。急速な社会転換の試みは、これまで悪とされてきたものを善に転換するような思考様式的大幅な変革を迫ることを含んでいた。ビジョン実施においてそのような危うい綱渡りを担ってきたのが娯楽庁であったと言える。

そのような実施機関の長官に、今回の内閣再編では、アール＝シャイフが起用された。彼はサウジ人に人気のあるサッカーの行政機関での経験があるほか、アラブ音楽では作詞家としても知られた人物である。さらにインターネットに掲載されている彼の写真では、髭を蓄え、いずれも伝統衣装ソウブを着用している。アール＝シャイフという姓が示すとおり、宗教界との血統上の結びつきもうかがえる。これまでの文化・娯楽が一定の不満や批判に晒されてきたことに鑑みれば、娯楽庁には欧米での滞在や留学の経験を積んだ者よりは、サウジ育ちで、伝統的イメージを有する人がふさわしいと考えられたのかもしれない。

他方で、今回の内閣改造では、情報大臣に MBC やロタナなどアラブ系音楽に強いテレビ局での経験を積んだトルキー・アル＝シャバーナを起用している。アル＝シャバーナは、たとえばサウジ人女性脚本家・監督による映画『ワジュダ』（邦題は、『少女は自転車にのって』）の制作を支援したほか、サウジ国内の映画制作者養成を支援する人物としても知られている⁽¹⁷⁾。情報省は、2003年から2018年6月までに文化部門を加えて「文化情報省」となっていたが、昨年、文化部門とメディア部門を切り離し「情報省」となった。情報省のウェブサイトによれば、「メディアの役割の変化に対応するため」という。そして、イスラーム政策に則った市民の表現の自由の保障、海外からのメディア批判への対応、真の情報と分析の提供などが課題として挙げられている⁽¹⁸⁾。明示的な記載はないものの、これらも

(15) ファッションショーに関しては、辻上奈美江2018「ファッション解放：サウジの女子力革命」『ニューズウィーク日本版』33（25），31-34. を参照されたい。

(16) “Mufti al-mamlaka yahsm jadal “al-tarfiḥ” : al-ḥaflāt al-ghanā’iyat wa-l-sīnimā..fasād” sabq, January 13, 2017.

<https://mobile.sabq.org>

（最終閲覧日：2019年2月8日）

(17) トルキー・アル＝シャバーナは、1964年生まれ。サウード大学法学部卒、ワシントンアメリカン大学法学修士。1996年に米国のMBCに勤務、その後、ロンドン、ドバイ勤務を経た後、ロタナへ転職した。

(18) 情報省ウェブサイト

<https://www.media.gov.sa/en>

（最終閲覧日：2019年2月8日）

また、「ビジョン2030」に向けた変化を目指したものであることがうかがえる。アル＝シャバーナの前任者であるアル＝アワードは金融法の専門家であることから、メディア専門家を入れることでこれらの目標の達成が目指されているのだろう。

まとめにかえて

これらから、2018年末の内閣改造は、少なくとも二つの特徴があると結論づけられるだろう。第一は、テクノクラートを、引き続き政治エリートとして登用する点である。欧米的な立場から専門的に見渡せ、またサウジの政界でも経験豊かな人材に実務を託しつつ、コア・エリートの王族は強い政治的リーダーシップを発揮することになるだろう。

第二の特徴は、海外経験は浅いが、ムハンマド皇太子のもとでキャリアを築いてきた若手に、王族警護や、「ビジョン2030」実現の鍵となる娯楽庁での任務を任せられた点である。サルマン国王のもとでは、ムハンマド皇太子をはじめ、政治エリートに30歳代の若い人物が選ばれてきたが、この傾向は今回の内閣改造によって、より強化されたことになる。これにより、中間エリートは、海外で専門知識を身につけたテクノクラートと、海外経験は浅いがコア・エリートのもとでキャリアを築いた若手という、異なる方向性を有する二つの集団が占めるようになった。この二集団に対しては、コア・エリートがリーダーシップを発揮しやすいとすれば、サウジでは当面、コア・エリートに権力が集中する構図が維持されそうである。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。